La Mezquita de Córdoba
－改造と拡張の痕跡としての接合部に見る保存・置換・拮抗・放置－

学部　正会員　肥後伯子(明治大学)

01. 研究の背景と目的

fig.1 メスキータ上空写真

スペイン南部の都市コルドバにメスキータと呼ばれる宗教建築がある。それは国内全土がイスラム支配下の時代にモスクとして建設され、約200年の間に三度の拡張を経験した。その後キリスト教勢力が国土を奪還すると、メスキータはカトリックの聖堂へ転用されモスクの中央に大聖堂が建設された。

この拡張と改造における先行物と介入物の衝突の様子はそれが起きた接合部に痕跡として残されているが、自身が経験した歴史を内部に積層する様子は極めて都市的と言えよう。

そこで、その複合的様相を可能にした条件を接合面の複雑な処理に求める。研究の対象とした75の接合部において異なる形態･構造･モデュールの重合を観察し、設計者による問題把握や処理方法を復元する作業を通して、拡張・改造にそれらの共通点や規則性の有無を見る。そしてモスクと聖堂の共存を可能とするこの建築を、従来の研究とは異なる視点から評価することを最終的な目的とする。

具体的な目的と方法は以下のように設定する。

①スペインでの現地調査(2010.08.26～09.07実施)で入手した文献や図版、また国内外の先行研究を用いてメスキータが経験した歴史的変遷を把握する。これはその変容が拡張と改造で生じた接合部に表れている状態を示すためである。

②その各々の局面を、形態の複合した様態を、先行物と介入物の構造・意匠・モデュールが出会って生じた重合状態として読み解き、その矛盾や不整合のようなものを設計者がどのように調停しようとしたかを推測することができる。それら手法に働いた“意図”を軸に対象部位を５つに分類し時間や装飾とは異なる軸から部位館の共通点や相違点を見る。

③様態が明らかになった接合部は、時間軸に沿ってメスキータを読み解く際の各時代の状況を物語る一種のドキュメントである。そこで異要素の共存状態と手法を把握することで、メスキータ全体は異なる原理を持つ要素の同居という緊張状態の下で成り立っていることを示す。また一見多様で無限の組み合わせがあるように見える接合形態は、“意図”による分類が可能であることから、ある「秩序」が存在することを提示する。

＊先行研究について

メスキータに関する先行研究は国内ではごく少数、海外ではヨーロッパを中心に多く存在するが、いずれもモスクの二重アーチや幾何学模様の装飾、大聖堂の複数の様式や祭壇廟など、この建築が持つ固有の特徴を示す部分要素の分析に集中している。したがってモス

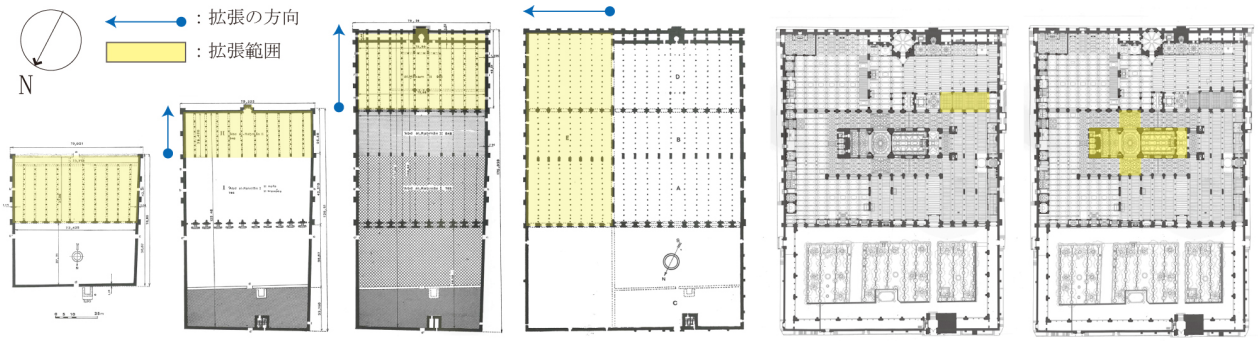


fig.2 初期工事範囲　fig.3 第一拡張範囲と全体図　fig.4 第二拡張範囲と全体図　fig.5 第三拡張範囲と全体図　fig.6 ゴシック聖堂建設範囲と全体図　fig.7 大聖堂建設範囲と全体図

クと大聖堂の異なる原理を持った建築が拡張と改造で生じた衝突の痕跡が残る、接合部に着目した研究は行われていない。

02. メスキータ形成の変遷

ここでは接合部が生じたモスクの三度の拡張工事とカトリックの大聖堂への改造工事について説明する。

788 年、コルドバで初めてエミール(総督)に就任した Abd al-Rahman 一世は、増加した都市人口を収容する大規模のモスクを建設した。これがメスキータの原形である(fig.2)。この後 Abd al-Rahman 二世、Al Hakam 二世が行った第一(833-848 年)・第二(962-965 年)拡張工事も、人口増加に対応したものだ(fig.3,4)。これら工事はいずれも南方向への拡張だった。Al Manzor によるモスクとして最後の拡張(987 年)は、これまでと異なり東方向へ行われた(fig.5)。

以上四度の工事を経て礼拝堂は現在と同じ規模となった。規則的に並ぶ円柱とその上に架かる二重アーチで支えられる内部空間の建築様式は建設当初から三度の拡張の際も踏襲されたもので、接合部を除けば工事の境界が分からない程、均質な空間が広がる。

大聖堂への改造時には大規模な工事が二度行われた。まず西側にゴシック様式の聖堂(15 世紀,fig.6)が建設され、次に礼拝堂中央にラテン十字形の大聖堂が建設された(1523-18 世紀中頃,fig.7)。聖堂は非常に高い大空間のため、工事の境界線上とその周囲に構造体が置かれ膨大な数の接合が起きた。

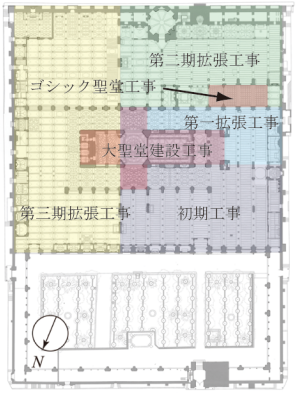


fig.8 各工事位置地図

近年は修復工事が行われ部位も多少影響を受けているが、基本的には聖堂の建設工事を以て現在のメスキータの姿が完成し、また接合部が出揃ったと言える(fig.8)。

03. 接合部での形態決定に働く意図の考察

本研究はメスキータの礼拝堂内部に残る、モスクの拡張と教会堂への改造で生じた接合部位を研究対象とする。

本研究で言う「接合」とは、以下の三つの状況を指す。

①拡張・改造に当たって、先行物と介入物の二つあるいはそれ以上の複数の要素による、直接的な衝突が起こった状況。

②拡張・改造時における境界面ではないが、礼拝堂全体の形態変化の影響を受けて、該当部位にも異なる要素の介入が飛び火する形で生じた状況。

③実際には単独の要素から成るが、その形態決定に先行物の影響が大きく反映されている状況。

これを踏まえ実際に接合が起きた箇所を下図に赤い枠で示す(fig.9-12)。

モスクの拡張工事で生じた接合は拡張の新旧の空間の境界面という同じ条件下で起きている。そのため接合に際しては一貫した手法が採られた(fig.13,14)。

拡張前は建物内外を隔てていた境界壁は、拡張により細分化された。新たに築かれた空間には先行する空間と同じ形式が踏襲され円柱が配置されている。接合部位を挟む拡張前後のアーチ周りでは、両者をつなぐ赤い縁の装飾が付加されるなど、新旧の異要素の「あいだ」に、最大限連続性を持たせようとする姿勢が見られる。これはモスクの拡張に共通する、均質空間を保つため境界面の違和感を和らげようとした、穏やかな接合手法である。

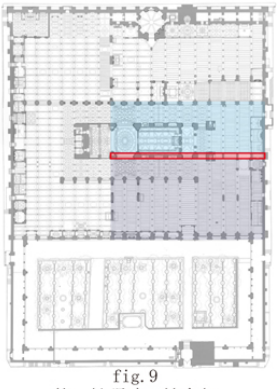


fig.9
第一拡張時の接合部

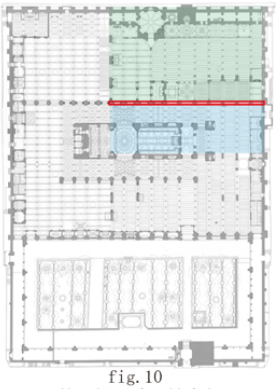


fig.10
第二拡張時の接合部

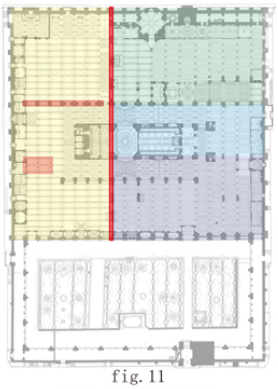


fig.11
第三拡張時の接合部

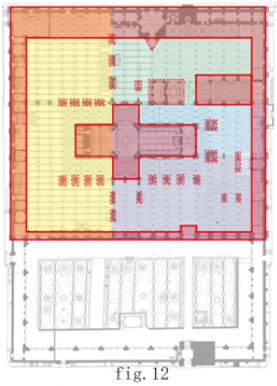


fig.12
大聖堂建設時の接合部

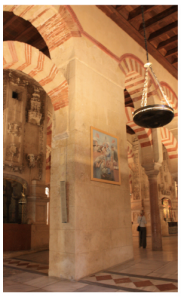


fig. 13
北側から見る
接合部位

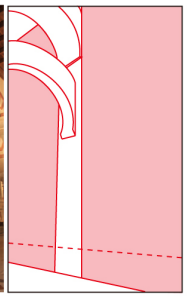
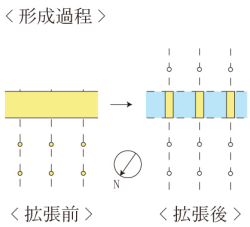


fig. 14
拡張前の接合部
（復元図）



これに対し聖堂への改造による接合形態は複雑かつ多様だ(fig. 16-19)。それは衝突する要素の持つ原理、周辺の環境など諸条件が考慮すべき問題として浮かび上がったことによる。モスク期に見られた一定の手法では解決出来ない場面に直面した時、建築家は異要素の「あいだ」を接合するため多様な手法を採用した：モスク期の形態や原理が接合後も失われず残されたもの、その反対に完全に聖堂期の要素に取り替えられたもの、どちらも排除されず意図的に異なる原理の共存が図られたもの、解決の判断が下されず結果的に異なる原理が同居するもの。

本研究ではこれら部位に働いた意図を接合が生じた場での先行形態の「保存」、介入形態による「置換」、二者の同居による「拮抗」と、その場での解決の「放置」、と捉え対象の部位を分類し、部位単体、各意図、そして全体を通して考察することで、メスキータが同一空間内でモスクと聖堂の同居を可能としている原理の解読を試みた。

04. 事例紹介：接合部位の様態の観察と分析

現地調査では定義に基づき接合部とした全 118 箇所を一つずつ観察し、その様態を写真とメモを取り記録した。これに現地で収集した図面資料を合わせ、75 の部位を対象とし分析を行った。その方法は、1)部位の様態の記述、2)部位の形成過程、3)部位の形態決定に働いた意図の考察、である。本論ではこれらを部位毎にカード化した。その一例を fig. 15 に示す。本文の両開き 1 枚が 1 つの部位を取り上げたカードである。

左側では筆者が調査の際に撮った写真や記述を通して、その部位の様態を示す。その部位がどの拡張／改造工事と関連して生じたものかも冒頭に記し、礼拝室全体における配置も再度記しておく。なお構成要素を記す欄には、現在見られる形態にその工事で生じた物的な姿を残していない場合も、そこに存在していたある時期に部位が変容する過程で、何らかの潜在的な痕跡を残している可能性があるとして名前を加えている。これは言わば、形態決定に働いた意図を解読する準備としての、部位の履歴書である。

一方右側では先行形態の様子を写真に加えた図や、部位が辿った変遷過程の図、また解読の記述によって、左側で提示された様態の発生経緯や、疑問に対する解説を記している。その部位はどういった経緯で生じ、その形態を決定付けた要因は何であるか。その際、先行形態と介入したそれは接合面でどのようにぶつかり、何が優先され何が廃棄されたのかを明らかにし、その部位に自身が分類されたカテゴリーの「意図」が確かに働いていることを確認することが目的である。疑問を解明する確かな物証が無い場合は、手元にある情報を使い出来る範囲の推測を試みている。右側のページは、収拾した資料や調査を元に筆者が作成した診断書である。

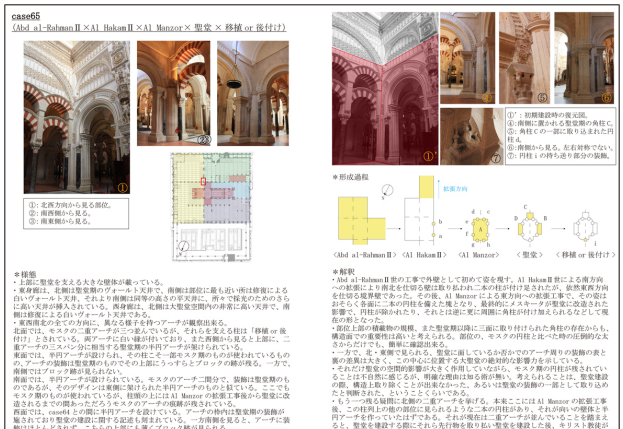


fig. 15　部位カード一例

05. 結論

＊接合部の観察を通して解読されるメスキータ

01 で設定した目的に対して以下のことが把握出来た。

(1)メスキータが経験した歴史的変遷は、拡張と改造で生じた接合部に痕跡として確かに残されていた。それはモスク期の円柱と二重アーチの拡張／改造後の様相に関して言えば、変化が無かったもの、聖堂の角柱に置換されたもの、形態は一部あるいは完全に失ったが元の様式が新しい形態の機能や装飾に残ったものなど様々な事例が挙げられたことで確認出来た。よって装飾面のみを通した分類・分析は適さないと分かった。

(2)本研究では、拡張と改造により生じた接合部の各局面で形態決定の際に働いた建築家の“意図”に着目した。それを「保存」、「置換」、「拮抗」、「放置」の四つ

fig.16
モスクの列柱空間

fig.17
メスキータ中心に位置する
大聖堂

fig.18
モスクの円柱列に
突如現れる聖堂の角柱

fig.19
聖堂とモスクの要素の
同居が生んだアーチ

に分類し、その意図の下でどのような手法が用いられ形態が決定されているか、その形態に意図毎のパターンがあるかを分析した。

その結果対象部位の中には、実際は二つかそれ以上の意図が働いたとすべきものが多く抽出された。分析ではそれらを意図の「複合」とした。また接合部の様態を明らかにすることで、同じ条件下の接合に対し建築家は異なる手法による解決を許容されていること、また一つの意図に対する手法は一対一関係では無く、幅広く対応可能であると把握出来た。よって接合部の様態は一見多様で無限の組み合わせがあるように見えるが、全ての事例が特有の形態を示すわけではなく、組み合わせにはある種の限定性があると分かった。これはメスキータにある「秩序」の存在を示す。

(3)(2)のように分類した時、境界面で衝突が起きた瞬間の様子を“形態は要素Aが、その表面の装飾は要素Bが採用された”というように、二つの要素を物的に見ている。この点では“意図”を軸とした形態の観察は、共次的な視点からメスキータ内に存在する原理を見出そうとしたものであった。

しかし実際の異なる要素がぶつかる「あいだ」の様態は、先行物に対して新たなものが介入した時間の積層を形態として定着したものである。つまり共次的視点を持った分析で把握出来たメスキータの多様性をより明確に捉える際には、複数の要素が積層された過程を部位毎に通次的に見る必要があるが、この視点による考察は、部位カードを作成した過程で各拡張と改造後の形態を記して行った。

以上を踏まえると、意図の「複合」とした部位は、異要素が積層された結果生じたと言える。そしてそれらの「あいだ」を取り持つために、様々な手法で解決が図られている。これはメスキータがモスクと聖堂という異なる建築様式を、同一空間内に同居させることを可能とする原理である。

＊おわりに

本研究は都市を読み解く際と同じ視点で単体の建築に存在する秩序の解読を、接合部という部分の考察から試みた。その結果、接合が起きた部分は異なる要素が積層した複合体であると認識することがメスキータの解読に繋がり、またそこでは様々な手法をもって解決が図られていると分かった。

多様性・対立性のある建築は、本研究を通してみたように、異要素を分離・排除せずむしろ同居させるなど融通性に富み許容度が大きい。その性質が失われない限り、建築は絶えず空間的・技術的な可能性を持ち続ける。接合部に自身が経験した歴史の痕跡を残すメスキータは、単体の建築でありながら異なる要素の共存の可能性と豊かな手法を提示する事例と言えるだろう。このことを千年以上もの時間を生きる建築遺産メスキータの価値と述べ、研究の結びとする。

＊参考文献

1) Manuel Nieto Cumplido,『La Mezquita de Córdoba:planos y dibujos』,2009
2)Manuel Nieto Cumplido,『La Catedral de Córdoba』,1998
3)Gabriel Ruiz Cabrero,『Dibujos de la Catedral de Córdoba』,2009
4)Manuel Nieto CUmplido,Luis Recio Mateo,『La Mezquita Catedral de Córdoba』,2001
5)Henri Stierlin 『ISLAM』,1988
6)山崎弘・田中世志治　「コルドバの大モスクの建築的考察」, 日本建築学会大会学術講演梗概集,